

甲南女子大学蔵本『古今和歌集』真名序の翻刻と性格

米 田 明 美

甲南女子大学図書館が所蔵する「伝慈円筆本 古今和歌集 上(下)」二帖は、

巻頭に真名序と仮名序を付し、一一一首(墨滅歌 十一首を含む)で一首も欠けていない完本である。歌数や墨滅歌を巻末にまとめているというスタイル等から、一般に流布している定家本系であることが判明している。書写年代は鎌倉中期と鑑定され、定家自筆本ではないものの、定家存命(一一六二―一二四一)中の書写と考えられる。以上から類推すると、親本は定家自筆本か、あるいは定家自筆本からさほど書写を重ねていないと考えられ、いまだ見出されていない初期の定家本とすることになる。定家は、『明月記』の記述などから、生涯十七度『古今和歌集』を書写したことは判明しているが、現在伝わる自筆本二本は、定家六十二―五歳の手であり、若い頃の書写本またはその古い転写本は見出されていなかったのである。

該本(甲南女子大学本)は、書写年代の古さ以外にも真名序を具備し、巻頭に置いているという大きな特徴をもつ。現存する定家自筆本は、二本とも真名序を有していないからである。この真名序が、親本である初期の定家本に元々備えられていたものかどうかは判断できないが、巻頭にあり仮名序や和歌と同筆であることから、鎌倉初中期書写の真名序であることは動かない。真名序の古い伝本は数が少なく、甲南女子大学本の持つ真名序がどのような内容でどのような性格なのか興味深い。今回翻刻を示すとともに、その特徴を明らかにして行きたい。

以下の通りの順で解説して行きたい。

一、甲南女子大学本の書誌

二、甲南女子大学本 真名序翻刻と他本との異同

三、特徴

一、甲南女子大学本の書誌

該本は、上下二帖とも縦一五・九糎、横一四・六糎の枡形本。列帖装。料紙は鳥の子(斐紙)。表紙は藍色雲鳥花宝尽くし模様の緞子地で、江戸時代に付け替えられた後補表紙。外題は、藍色の雲紙の題簽で、左上隅に「古今和歌集 上(下)」とあり、室町時代のものと考えられる。外題の題簽は、室町時代に付け替えられた表紙の一部であったか。表紙は、鎌倉初中期の原表紙から、少なくとも二度替えられているか。見返しは、金銀箔の野毛散らし。これは鎌倉期の当初のものか。

上下二帖に分かれたれ、真名序仮名序は冒頭に位置する。真名序の漢字部分は一行十一から十三文字で、一面八行書き。和歌部分は和歌二行書きで一面十一行書き。

「古今和歌集 上」は、十括り。巻頭に一丁、巻末に二丁の遊紙。第十括りめの最後の二丁は、裏表紙と見返しの間。墨付は一〇九丁。

「古今和歌集 下」は十括り。巻頭に二丁、巻末に三丁の遊紙。第一括りの最初の二丁は、表紙と見返しの間に挟み、第十括りめの最後の二丁は、表紙と見返しの間に挟み込んである。墨付は一〇六丁。

他に正筆書と極札が各一枚、計二枚付く。

「正筆書」

見返しの次、遊紙右端に貼り付け

「六半本古今集全三冊

外題は

慈鎮和尚真蹟 和歌所堯孝法印

〔極札〕

古筆了延(七代目)

表「慈鎮和尚 古今和歌集全部 二冊

年乃うちに 琴山印」

裏「古和調者 六半本 乙卯十二

や万と哥 一」

正筆書を記した鑑定者は不明であるが、藍色の雲形模様入りの美しい小片であり、おそらく江戸時代のものであろう。外題の筆者とする堯孝は、明徳二(一三九二)年生まれで頼阿の曾孫、法印権大僧正に至る。足利義教の信任厚く、『新続古今和歌集』の和歌所に推挙されている。該本の題簽は藍色の雲紙で、室町時代によく用いられた表紙の特徴を表しており、その表紙の外題を切り取り題簽としたものと考えられる。その外題の筆者が堯孝であるかどうかは、判断し難しい。極札は、古筆七代目了延(一七〇四―一七七四)の極めたもので、「乙卯十二」は享保二十年(一七三五)十二月である。伝承筆者の「慈鎮」は慈円のこと、慈鎮は諡号である。平安時代末期から鎌倉時代初期の僧であり、藤原忠通の子で、天台座主を四度勤めている。

書写年代については田中登氏によると、

・筆者について古筆家第七代の古筆了延の極札に慈鎮(慈円 慈鎮は諡号)とあるが、彼の筆跡は和歌懷紙が伝存するが、それと比較して該本は必ずしも同筆とはいえない。しかし、その書風は慈円風であり、慈円よりやや後代の人が、慈円の書風に習って書いたものと思われる。

・一首の和歌を二行で書く際、五七五で一行、七七で一行と、上句・下句をはっきりと一行ずつ書き分けるのは定家以後に定着した書き方であるが、該本では、四句目の七が一行目にきていたり、三句目の五が二行目に回ったりと一定しておらず、この書式は、鎌倉中期以前の古い形を示している。

以上、書風と書式から、甲南女子大学本は、およそ鎌倉の初期から中期頃(一二二

〇―一二四〇)の間に書写されたものと鑑定された。

二、甲南女子大学本 真名序翻刻と他本との異同

該本は真名序を巻頭に置く。五丁表裏分で、墨筆の異本注記と朱筆の異本注記(「イ」の有無と合点の有無とで四種に分けられる)を合せ持ち、これらが該本の書写者と同筆なのか否かなどは、今のところ判断つかない。今回この翻刻とともに、他本との異同を挙げておく。用いた諸本と略号は次の通りである。

〔筋切〕…縦に銀線の入った料紙であるので、「筋切」と称する。筆者は藤原定美で、久曾神昇氏によると康和三(一一〇一)年ごろの書写か。上帖は、最初に真名序、次に仮名序があり、巻一から巻十まで完存している。下帖は、すべて分割せられ、部分的に断簡として存している。(書藝文化新社『和漢墨寶選集第二十六巻 藤原佐理 筋切真名序・仮名序』から影印本) 筋

清輔保元二年本…保元二(一一五七)年に藤原清輔が書写したものの転写本であるが、奥書によると元弘(一一三二)以前の鎌倉中期ごろの書写、加賀の前田家所蔵。現在尊経閣文庫蔵。仮名序・真名序を具備するが、六箇所の欠脱があり、完本ではない。真名序は巻末に置く。(尊経閣叢刊『古今和歌集 清輔本』から複製本)

前

俊成建久二年本…建久二(一一九二)年に俊成が書写したものの転写本で、上帖の奥書によると建長三(一二五二)年書写。穂久邇文庫蔵。真名序・仮名序ともに揃うが、巻一(春上部)などに脱落がみられ、完本ではない。真名序は巻頭に置く。(日本古典文学会『日本古典文学影印叢刊 古今和歌集』から影印本) 俊

定家貞応二年本…貞応二(一二二三年)年七月に定家が書写した本の系統。御子左家の二条家の古今伝授に用いられたため、最も広く流布。両序を持つが、真名序

は卷末に付く。冷泉家時雨亭文庫蔵に、覺尊法印（為家の息子）が書写し、文永四（一二六八）年四月に為家が校合した本がある。（朝日新聞社『冷泉家時雨亭叢書』から影印本）**定**

清輔本系には、他に永治二年本として、源家長が建仁元（一二〇一）年書写した本の転写本として、宮本本（鎌倉前期書写 重要文化財）があるが、両序を有するものの、真名序は奥書の後に記されており、家長が書写した清輔本にはなかったと考えられる。また永暦二（一一六一）年に俊成が書写した本の転写本として、両序を有する国立歴史民族博物館蔵本があるが、これも真名序は他本から補ったもので、今回は用いない。

猶、朱筆の傍記については、文字の下に「※」を付す。また朱筆の中で合点の付してあるものには、判別できるもの限り「、」を付けた。

翻刻

1才

古今和詞集序

夫和詞者託其根於心地發其
花於詞林者也人之在世不能無
為思慮易遷哀樂相變感生
於志詠彰於言是以逸者其巖

ナシ―紀淑望 俊定
者―ナシ 前

彰―形 筋俊定前
其巖―其聲 俊定―其詞 筋前

樂怨者其吟悲可以述懷可以發
憤動天地感鬼神化人倫和夫婦
莫宜於和詞々々有六義一曰風

1ウ

二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌
若夫春罵之囀花中秋蟬之吟

樹上雖無曲折各發謠謠物皆有
之自然之理也然而神世七代時質
人淳情欲無分和詞未作逮千素
菱鳥尊到出雲國始有三十一字

之詠今反詞之作也其後雖天神
之孫海童之女莫不以和詞通情

2才

者爰及人代此風大興長詞短詞
捉頭混本之類雜牀非一源流漸
繁譬猶拂雲之樹生白寸苗之煙浮天
之波起於一滴之露至如難波津之付
献天皇富緒河之篇報太子或事開

神異或興入幽玄但見上古之※詞多
存古質之語未為耳目之翫徒為

教戒之端古之○天子每良辰美景詔

囀―轉（左横「囀」傍記）**定**
吟―鳴（右横「吟」傍記）**筋**

七代―七代之**前**

鳥―鳴 **筋**

ナシ―出・雲（「・」の右横「之」傍記）**筋**
始―初（右横「始」傍記）**筋**
有―ナシ **前**

反―返 **筋前**

孫―絲（右横「孫」傍記）**筋**

者―者也 **筋一之前**

掟―搜 **筋前一旋 俊定**

河―ナシ **定** 開―関 **筋前**

ナシ（朱筆○右横「之イ」傍記）―之 **筋後前**
存―ナシ（「多古」の間右横「存」傍記）**筋**

質―質（右横「賢」傍記）**筋**

語―牀 **前**

○―之 **前**

天子―天子斯 **筋**

2ウ

侍臣預宴筵者獻和詞君臣之情
由斯可見賢愚之性於是相分所以
隨民之欲擇士之才也自大津皇子
之初作詩賦詞人才子慕風繼塵
移彼漢○之字化我日域之俗民業

一改和詞漸衰然猶有先師柿本
大夫者高振神妙之思獨步古今之
間有山邊赤人者並和詞○※仙也其餘

3才

業和詞者綿々不絕及彼時變澆
漓人貴奢淫浮詞雲興艷流泉涌
其實皆落其花孤榮至○好色之

家以此為花鳥之使乞食之客以此

為活計之謀故半為婦人之右難進
大夫之前近代存古風者纔二三人
而已然長短不同論以可辯花山僧
正尤得詞然其詞花而少實如圖

臣預宴—宴預 筋

斯—是 筋

隨—隨之 筋

字—文 俊一字 (右横「宗」傍記) 筋

化—他 前定

日域—日本國 (「本」右横「域之」傍記) 筋

柿本—柿下 俊

○—之 前俊

澆漓—繞醜 (「繞」右横「澆」傍記) 筋

皆落—皆以落 前

孤—獨 筋—獨 (右横「孤」傍記) 俊—獨

以 前

以比—以之 前

乞食之—乞食 前

謀—媒 筋前

大夫—丈夫 定

而已—ナシ 筋俊定

然其—其甚華 (右横「然歌其鉢」傍記) 筋

一其 前

詞—歌 前—鉢 (右横「詞」傍記) 俊

少—小 俊

3ウ

畫好女徒動人情在原中将之詞其
情有餘其詞不足如萎花雖少彩
色而有薰香文屋康秀詞文琳

巧詠物然其鉢近俗○※如買人之着

鮮衣宇治山僧喜撰之詞其詞華

麗而首尾停滯如望秋月遇曉雲

少野小町之詞古衣通姬之流也然

艷而無氣力如病婦之着花粉大

4才

友黑主之詞古猿丸大夫之次也頗有

逸興而鉢甚鄙如田夫之息花前也

此外氏姓如※流聞者不可勝數其大底

皆以艷為基不知和詞之趣者也俗

人爭事榮利不用和詞悲哉雖貴

兼相將富餘金錢而骨未腐於土中

文屋康秀詞—ナシ 筋定—文室康秀 (「文室」
右横「号文琳」傍記) 俊—文屋康秀詞物然 前
文琳—ナシ 俊—文琳 前

喜撰—撰喜 筋定 之—他本ナシ

詞其詞華麗—詞甚美麗 筋—其詞甚華麗 俊

一詞甚華麗 前—其詞華麗 定

停—淳 (右横「停」) 俊

少野—小野 筋前俊定 小町—少町 俊

艷而—而其艷 筋

友—友 (右横「伴」傍記) 筋

之—其 (右横「之」傍記) 筋—ナシ 前

次—次 (右横「流」傍記) 筋

「如」は「姓」と「流」の間に小さく朱筆

「和」に朱筆で「ニ(ミセケチ)上書き右「イ」

「之」に朱筆で「ニ(ミセケチ)上書き右「イ」

和—ナシ 筋俊定 之—ナシ 筋

悲哉—悲哉、 定

用和—聞和 (右横「用詠」傍記) 筋—由詠

俊—用詠 定

兼—燕 (右横「兼」傍記) 筋

相將—將相 前

名先滅於世上適為後輩被知者唯

和謂之人而已何者語近人耳義通

4ウ

神明也昔平城天子詔侍臣令撰萬葉集自爾以來時歷十代數過百

年其間和謂棄不被採用雖風

流如野相公雅情如在納言而皆依

他才聞不由斯道顯伏惟陛下御宇

干今九載仁流秋津嶋之外惠茂
筑波山之陰測變為瀨之聲寂々閉
口砂長為巖之頌洋々滿耳思繼

5オ

既絶之風欲興久廢之道爰詔大
内記紀友則御書所預紀貫之前甲
斐少目凡河内躬恒右衛門府生壬生
忠峯等各獻家集並古來奮謂

於―他本ナシ

輩―世 定

通―貫 筋一憤 俊定

以來―来（右横「降」傍記）筋

歴―曆 前定

其間―其後 俊定

採用―採（右横「採」傍記）筋一採 前俊定

流―ナシ 定

相公―宰相 俊定一宰相（右横「相公」傍

記）筋 雅―輕 筋俊定 依―以 俊定

聞―間（右下「聞」傍記）定

「由」左横「二（ミセケチ）」右横「以」傍記

伏惟―他本ナシ

陞―階（右横「陞」傍記）俊一階 前

御宇干―御宇 前定―御天下干 筋俊

秋津嶋―秋津州 筋俊定

之―ナシ 俊

為―ナシ 前

滿―盈（右横「滿」傍記）筋

○※於^{曰續萬葉集イ※}是重有詔部類所奉^{、之イ※}○※謂^レ勅^レ為^二一○※―曰續萬葉集 定 俊はイ本注記

前は「曰續萬葉集士於色 或本」補入

奉―奉之 筋前定一献之 俊

勒―勤（右横「勒」傍記）筋

和歌―ナシ 前

少―小 俊

乎―哉 定

朝―嘲 筋定

遇―過（右横「遇」傍記）筋

5ウ

謂之中興以樂吾道之再昌嗟呼人丸

以―ナシ 筋

再昌―再唱（唱）右横「昌」傍記）筋

人丸―人麿 俊

斯―欺 筋

既没和謂不在斯哉^{ハイ※}字時延喜五年
歲次乙丑四月十五日臣貫之等謹序

十五―十八 前

謹序―解（右横「謹序」傍記）筋

三、特 徴

以上の翻刻及び異同を見ていくと、全体的に大雑把な傾向として、筋切・前田家本（清輔保元二年本）・俊成本（俊成建久二年本）・定家本（定家貞応二年本）の中では、前田家本・俊成本に近いと思われる。特に、俊成本は、一行の字数も近く、また最初の六行は字配りも一致している。

異同の中でも漢字の用い方の相異は別として、主だった点を挙げると以下の通りである。

①作者名

「古今和歌集真名序」の下に記されている「紀淑望」であるが、俊成本・定家本

にはあるが、古い写本にはない。筋切・前田家本ではなく、該本もない。

②文屋康秀詩文琳(3ウの三行目)

この「文屋康秀詩」が入っている本は非常に少なく、筋切・定家本にはない。建久二年の俊成本は「文室康秀」とし「文室」の右横に「号文琳」と傍記がある。校本をみても、補入ではなくこの語を含んでいるのは前田家本のみと記されている。

③曰續萬葉集イ※(5オの五行目)

この「曰續萬葉集」は該本にはなく、朱筆の「イ」として傍記されている。この「續萬葉集」は仮名序にも記述はない。真名序に記されていない本は筋切である。前田家本は「或本」として「曰續萬葉集士於色」の補入があり、俊成本も「名曰續萬葉集 イ本私」と傍記されている。校本を見ても、ない本は本朝文粹本・伝寂蓮本・基俊(黒川本の校異による)本のみであり、古写本にはない本が多い⁽⁴⁾。

該本は筋切とそう近いとも言えない。だが以上の①②③は、貞応二年定家本より、古い姿を残していることを示していよう。前田家本・俊成本は鎌倉初期の書写を伝えており、該本も平安末期から鎌倉初期に流布していた真名序の姿を留めているというべきであろう。

注

- (1) 伊達家旧蔵本：伊達家に伝わったので、「伊達家本(伊達家旧蔵本)」と称する。現在個人蔵。藤原定家自筆本(重要文化財)である。奥書に年号が記されていないため書写の時期はわからないが、片桐洋一氏説によると貞応二(一二二三)年七月本と嘉禄二(一二三六)年四月本の間に書写されたか。定家六十二歳となる。(片桐洋一「解題」『冷泉家時雨亭叢書 第二巻 古今和歌集 嘉禄二年本 古今和歌集 貞応二年本』平成六年十二月 朝日新聞社)
- 嘉禄二年四月本：嘉禄二(一二三六)年四月に定家が書写した本(国宝)、定家六十五歳。冷泉家時雨亭文庫蔵。
- 現存する定家自筆本は、以上の伊達家旧蔵本と嘉禄二年四月本の二本のみである。
- (2) 該本の翻刻については、ミセケチ・補入についても忠実に示したが、異同部分の他本のミセケチは採用しなかった。ミセケチ印のない傍記のみ示した。
- (3) 西下経一・滝沢貞夫『古今集校本(新装ワイド版)』笠間書院 二〇〇八年。

(4) 片桐洋一『古今和歌集全評釈(上)』講談社 一九九八年。